

## 2つの形で排除される発達障害「グレーゾーン」の障害社会学的再考

——わかる、わからない / できない、できる——

立教大学大学院社会学研究科博士課程前期課程 田野綾人

### 1. 目的

発達障害者でもある報告者も感じるように、近年、発達障害者に対する支援は法整備や医療制度も含めて日々改善されている。しかしながら、その支援が充実すれども、排除されやすい状況にある人々がいる。発達障害と「健常」のグレーゾーンにいる人々だ。本報告は、障害の社会モデルに対して発達障害グレーゾーンという現象に注目し、再考することが目的である。

まず、社会モデルは、「ディスアビリティを個人が被る制約条件とみなすのではなく、社会の側こそを”問題”と定める」(Barnes, Mercer, Shakespeare 1999=2004:15)という立場を採ってきた。しかしながら、障害者に「なれなかった」人々はどうすればよいのだろうか？

そもそもとして、社会モデルは「能力」という再分配ができない領域に対して、経済的、環境的な合理的配慮を通じて間接的に再分配を目指すものであったともいえよう。しかしながら、発達障害者と同様の苦しみを落ちながら、グレーゾーンとされた人びとは、その再分配を受ける資格を得られず、ドクターショッピングを繰り返すか、自らで補いながら「矯正」する(あるいは、運任せの非制度的な支援を受ける!)ことでしか、生活の改善が見込めない。障害者であろうとすれば、「ニセモノ」「自称」と言われ、健常者に留まれば「無能」「怠け者」とされる。ある意味では、障害者以上に切迫した状況にあるともいえよう。

### 2. 方法

そこで本報告は、発達障害を取り巻く状況に注目して、発達障害になるとはどういうことなのか、医学的言説・障害学的言説・社会学的言説・法律などに注目し文献調査を行うものである。

### 3. 結果・考察

以上のことから、グレーゾーン者には2つの形で排除が行われていると結論付けた。それは、①社会的な支援を受けるためには、医学的な支援を受けていなければならない ②「発達障害者」という想像の共同体を支える障害者からの排除 である。

①については、発達障害者と似たような状況にあるが、医学的に発達障害ではない/断言できない/診断されたくない ために単なる「無能」や「落ちこぼれ」というレッテルを貼る(貼られた)人々を救う制度が充実していないことが問題となる。このことは、グレーゾーンを障害とわかるかわけないかという重要な論点となるだろう。②については、障害に関わらず発生するような党派主義の毒や、他者を排除することで満ちそうとする承認欲求などが問題となる。

いずれにせよ、生活上の困難を抱えているが故に、あらゆる機会において欠格者とされている人々が窮策として「障害」というものを利用している状況がある。しかしながら、「障害」概念は医学的である為に、障害にわけられない人は必然的に発生する。本報告では、現状を捉えたうえで、グレーゾーンを障害とわかるかわけないか、どのような支援が最適か再考したい。

### 文献

Barnes, Colin, Mercer, Geof, Shakespeare, Tom 1999 *Exploring disability : a sociological introduction* Polity Press.(=2004 杉野昭博・松波めぐみ・山下幸子訳『ディスアビリティ・スタディーズ：イギリス障害学概論』明石書店.)